

病害虫発生予察情報予報第 2 号 (6 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

1. 農薬の使用前には、ラベルの内容を確認しましょう。
2. 農薬は、ほ場面積等に応じた必要量を調整し、残りが出ないようにして下さい。万一、残った場合でも、水系に廃棄してはいけません。
3. 農薬の散布においては、周囲への飛散を避けるため、風向きに注意して下さい。また、強風時の散布は控えましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (早期)	葉いもち	並	 いもち病
	イネミズゾウムシ	並	
水稲 (早植え)	葉いもち	並	
	イネミズゾウムシ	並	
	葉いもち	並	
	スクミリンゴガイ	並	
水稲 (普通期)	1. 病害虫全般 (いもち病、トビイロウンカ等) 育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。		
	2. スクミリンゴガイ 被害を防止するため、用排水路での貝及び卵塊の捕殺、移植後の浅水管理や薬剤防除等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、「佐賀県病害虫防除のてびき」および「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル（農水省 HP）」を参照する。		
	3. もみ枯細菌病・白葉枯病 もみ枯細菌病が育苗箱で発生した場合や、白葉枯病の常発圃場では、これらに登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。		
水稲全般	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	並	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	並	 炭疽病
	うどんこ病	並	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	多	
	アブラムシ類	多	
	1. 立枯性病害（炭疽病、疫病、萎黄病） 健全苗を育成するため、親株床から薬剤防除を実施する。発病株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。 既に、炭疽病による親株の立枯れを、複数圃場で確認している。 <u>伝染抑制効果が著しく高いビニル雨よけ下で育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。</u> また、灌水を過度に行うと、高湿度条件が長時間維持され、発病が助長されるため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する。 2. うどんこ病 一部圃場で発生が認められている。子苗への伝染を防ぐため、親株床から薬剤防除を実施する。 3. ハダニ類 本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5～7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。		
アスパラガス	茎枯病	並	 ネギアザミウマ
	褐斑病	やや多	
	斑点病	並	
	アザミウマ類	やや多	
	ハダニ類	並	
1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。特に近年発生が多い褐斑病は、感染から発病まで潜伏期間が 20～30 日と長いことから、 <u>予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する</u> （前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第除去し、適切に処分する。 2. アザミウマ類 現時点において、発生が平年よりやや多い。虫見板への払い落とし等を行い、発生状況に注意し、早期防除に努める。			
施設果菜類	1. アザミウマ類、コナジラミ類 施設内に残ったアザミウマ類やコナジラミ類の野外への拡散を防ぐため、栽培終了時に施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行い、これらの害虫を死滅させる。なお、次作の定植までの期間が短い作型であっても、日中の高温日を確保できるよう適切な密閉期間を設ける（詳細は、令和3年6月4日付け病虫害対策資料第4号参照）。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)	
果樹全般	果樹カメムシ類	並		チャバネアオカメムシ
	1. 病害対策 気象予報によると、6月は降水量がやや多い予想となっているため、降雨の合間をぬって早めの防除を行う。 2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。			
カンキツ	そうか病	並		カンキツ かいよう病
	かいよう病	並		
	黒点病	並		
	灰色かび病	並		
	ミカンハダニ	並		
	チャノキイロアザミウマ	並		
	1. 傷果、落果防止(灰色かび病、チャノキイロアザミウマ、果樹カメムシ類等) 本年の温州ミカンの着花量は少ない。病虫害による減収を防ぐため、傷果や落果の原因となる灰色かび病等各種病虫害の防除を徹底する。 2. かいよう病 6月までは本病の重要な防除時期であり、今後の多発生を防ぐため、本病が発生しやすい園および幼木園では防除を徹底する。			
ナシ	黒星病	並		ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	並		
	1. 黒星病 6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬頃は主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。			
ブドウ	黒とう病	並		ブドウべと病
	べと病	多		
	褐斑病	並		
	チャノキイロアザミウマ	並		
	1. べと病 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。また、べと病の罹病葉は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する 2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前(大豆大期)に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。			
キウイフルーツ	1. かいよう病 感染防止のため、6月までは <u>すべての園において</u> 、銅水和剤を主体とした 定期的な薬剤防除を実施 する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすく、また枝枯れや樹液の漏出など症状がひどく出やすいため、特に防除対策を徹底する。			 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
茶	カンザワハダニ	並	 輪斑病 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	やや少	
	チャノキイロアザミウマ	少	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	
	チャノコカクモンハマキ	並	
	チャノホソガ	並	
	炭疽病	やや多	
1. 炭疽病 新芽開葉初期が防除適期となるので、この時期に薬剤散布を実施する。二番茶摘採後に枝条更新を行わない園では、確実に防除を行う。 2. カンザワハダニ 多発生すると防除が困難となるため、二番茶の摘採に向け園内の発生状況の把握に努め、発生があった場合は二番茶の摘採前使用日数に注意して薬剤防除を行う。 3. クワシロカイガラムシ 一部圃場で発生が見られる。防除適期は第一世代幼虫ふ化期の5月下旬～6月上旬頃である。園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期に防除を実施する。 有効積算温度により算出した第一世代の防除適期は、標高90m地域は5月25～27日で、標高300m以上の地域は6月上旬であると予想される。 4. ナガチャコガネ 二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）が、羽化期～成虫発生初期にあたり防除適期であるため、発生圃場では薬剤防除を実施する。 5. 輪斑病、新梢枯死症 摘採等による葉や茎の傷口に病原菌が付着して感染するため、発生の多い圃場では二番茶の摘採直後に薬剤散布を行う			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害防除のてびき」も参照してください。

佐賀県病虫害防除のてびき掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321928/index.html

QRコード→



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平成（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

6 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 4 年 5 月 19 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (23.5℃)	40	並
降水量	20	40 (327 mm)	40	やや多い

Ⅲ. 6月の予報

水稻（早期、上場地域）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 12 圃場
調査日：5 月 19 日



定期調査圃場の様子

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並〈±〉

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、活着後は速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

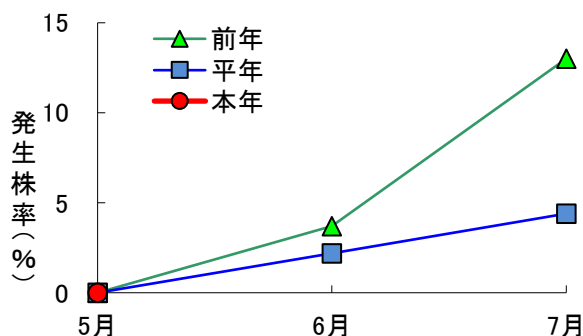


図1 早期水稻での葉いもちの発生推移

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 食害株率：36.7%（平年 33.2%、前年 38.7%）

平年比：並〈±〉

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上確認されたら、薬剤防除を行う。

水稻（山間早植え）

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和3年産の山間早植え水稻における穂いもちの発生は、平年並であった。〈±〉

- (2) 6月の気象予報
降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、活着後は速やかに処分する。
(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

- (1) 前年の発生状況（越冬密度）
前年の発生は平年よりやや少なく、越冬数は平年よりやや少ないと考えられる。〈ー〜±〉
(2) 6月の気象予報
気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

- (1) 前年の穂いもちの発生状況
令和3年産の普通期水稻における穂いもちの発生は、平年並であった。〈±〉
(2) 6月の気象予報
降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 苗いもちの発生がみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。
(2) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、活着後は速やかに処分する。
(3) その他については、特記事項を参照する。

2. スクミリングガイ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

- (1) 越冬状況（図1参照）
令和3年(2021年)12月〜令和4年(2022年)2月の佐賀市の平均気温は6.7℃であり、平年(7.1℃:10年平均)並であったことから、水田内での越冬生貝率は平年並と推定される。〈±〉
※過去の冬期の気温と翌春の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。
(2) 6月の気象予報
気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

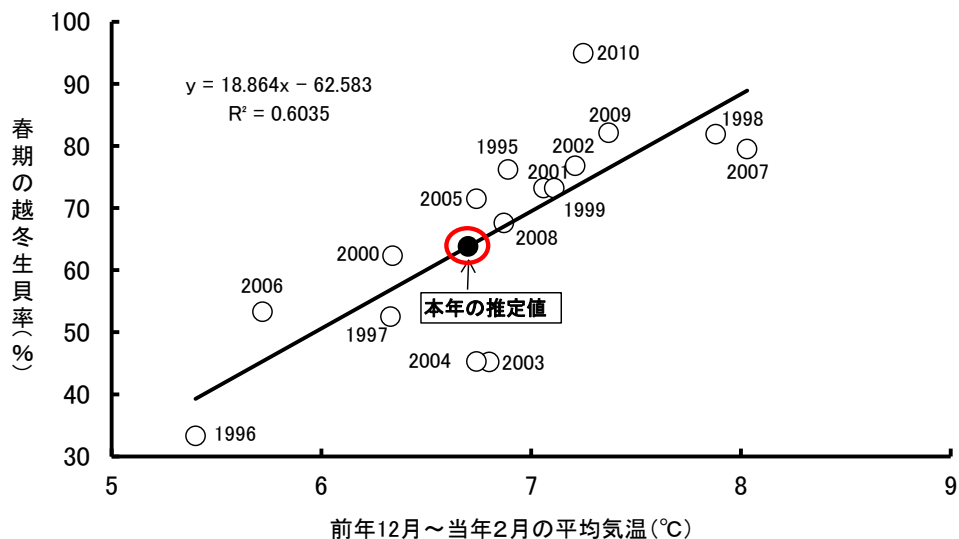


図1 冬期(12～2月)の佐賀市の平均気温と水田内でのスクミリングガイの越冬生貝率(4月)との関係
 ○:1995～2010年の実測値(佐賀市の気温と、佐賀市内の同一水田における越冬生貝率。水田の越冬調査は、2010年で終了)
 ●:2021年12月～2022年2月の気温を用いて上記の関係式から推定した本年(2022年)春期の越冬生貝率

水稻（全般）

[【概要に戻る】](#)

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査(早期水稻)

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

② 小麦における20回すくい取り（第1表参照）

ヒメトビウンカ第1世代幼虫数49.0頭（平年25.6頭、前年25.1頭）

平年比：やや多（±～+）

(2) 近年の動向（第2表参照）

小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、近年やや低く推移している。

〈－～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウンカを対象とした薬剤防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生
(令和4年5月16～19日)

調査地点	20回すくいとり虫数 (各地点2圃場平均) 頭
佐賀市 1	126.5
佐賀市 2	17.5
鳥栖市	3.0
神埼市	71.5
小城市 1	38.0
小城市 2	7.5
多久市	52.5
武雄市	41.5
鹿島市	13.0
吉野ヶ里町	156.0
白石町	12.5
平均	<u>49.0</u>

第2表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
保毒虫率 (県平均)	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
	1.3	4.2	0.9	1.0	0.0	0.3	0.0	1.1	0.3	0.3	0.5	0.0

注)5月中～下旬にヒメトビウンカを小麦圃場から採集し冷凍保存後検定を実施
(令和3年採集虫は保存後令和4年1月に検定実施)。

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場

調査日：5月16～19日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：5.6%（平年 4.7%、前年 16.4%）

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

気温は並で、降水量はやや多く、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場によりハダニ類の薬剤感受性が異なるため、

防除効果を確認し、薬剤を選定する。

(2) その他については、特記事項を参照。

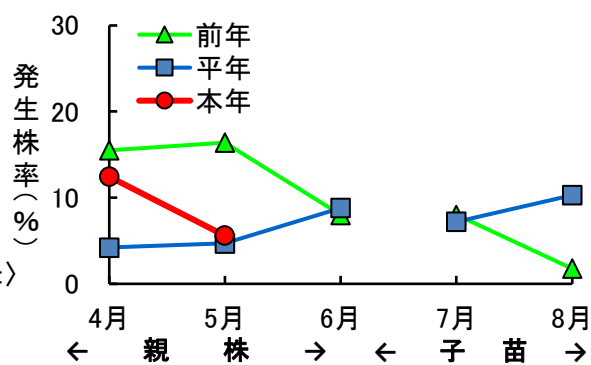


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：5.6% (平年 11.4%、前年 0%)

平年比：やや少 (ー～±)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±～+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

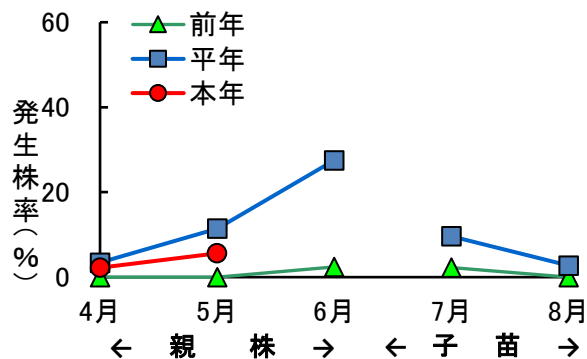


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.1% (平年 0%、前年 0%)

平年比：多 (+)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±～+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

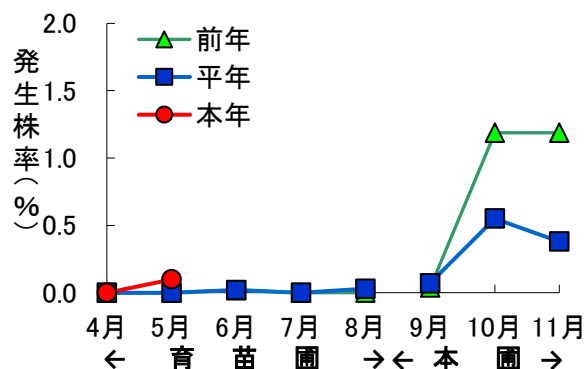


図1 イチゴ立枯症の発生推移

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：23.2% (平年 10.2%、前年 6.8%)

平年比：多 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

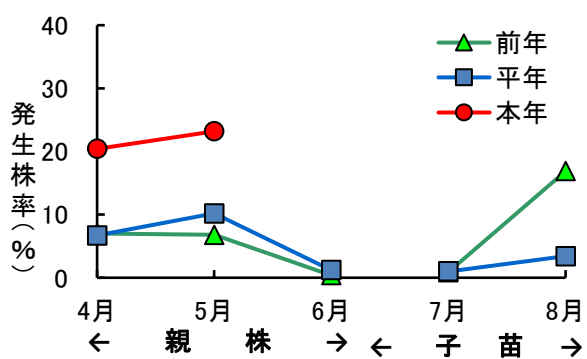


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査 8 圃場

調査日：5 月 16～18 日



定期調査圃場の様子

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生茎率：0%（平年 0.2%、前年 0.6%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 6 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

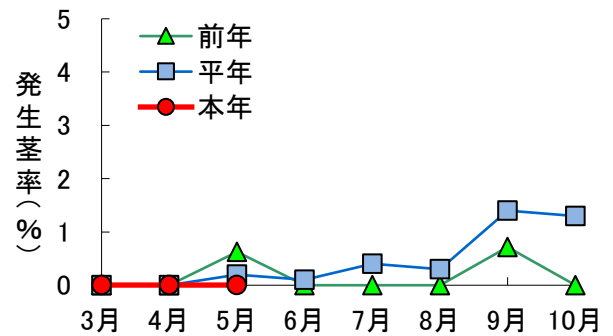


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：2.5%（平年 0.1%、前年 0%）

平年比：多（+）

ただし、発生は一部圃場に限られる。

(2) 6 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

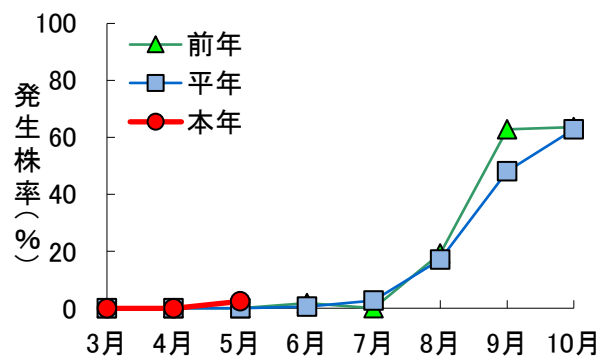


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：0%（平年 0.7%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 6 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

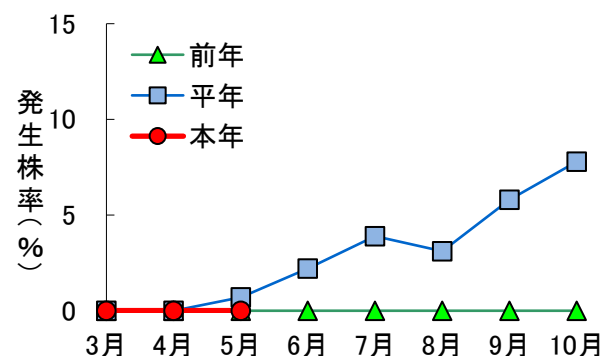


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：47.5% (平年 35.7%、前年 43.8%)

平年比：やや多 (±~+)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

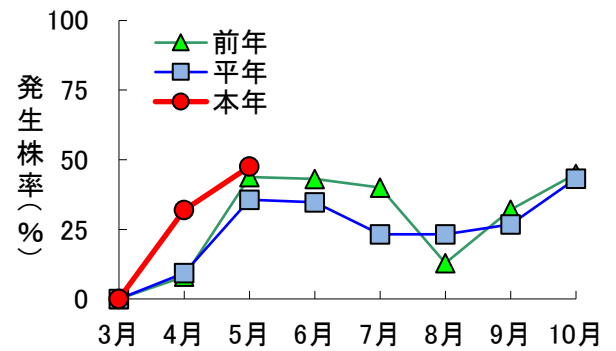


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査

① 越冬点率：29.4% (平年 40.6%、前年 18.8%)

平年比：並 (±)

② 平年越冬虫数：0.15 頭/m² (平年 0.29 頭/m²、前年 0.12 頭/m²)

平年比：並 (±)

・ 地点別データ等は令和3年度病害虫発生予察情報第13号 (4月の予報) を参照。

(2) 発生の現況

① 予察灯 (図1 参照)

平年比：並 (±)

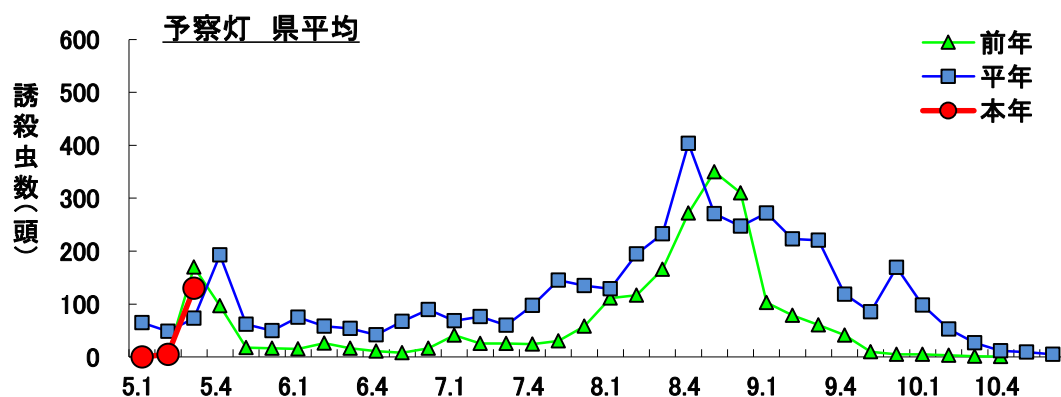


図1 予察灯 (佐賀市、小城市) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並 (±)

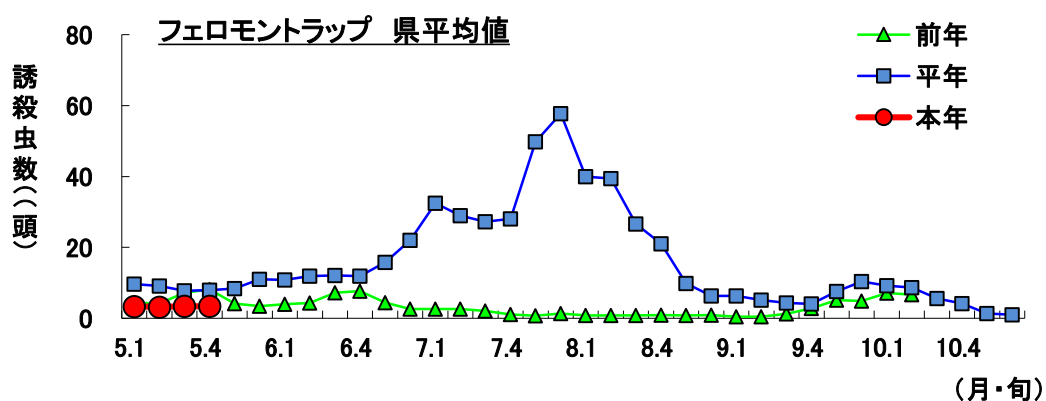


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況は地域や園により異なるため、園内外を確認し、発生が確認されたら防除を行う。

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 8 圃場

調査日：5 月 13～20 日



1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1 参照）

発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 6 月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。
ただし、1 回目の散布から 200 mm 以上の降雨があれば薬害を生じにくい。

定期調査圃場の様子

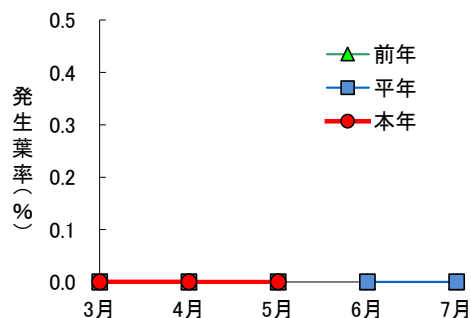


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1 参照）

発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）

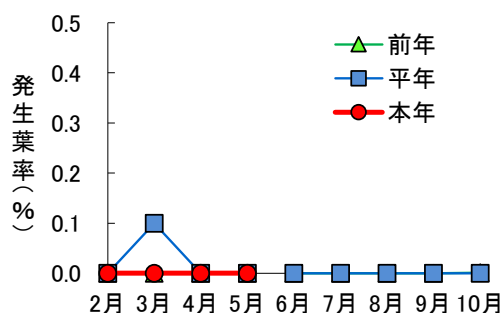


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）など発生が問題となる園では、無機銅剤水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。
- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。
- (2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、累積降雨量が 200～250mm（マシン油乳剤加用の場合は 300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (3) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は抜根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生率：11.9%（平年 5.9%、前年 2.1%）

平年比：やや多（±～＋）

ただし、発生は一部圃場に限られる。

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量がやや多く、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生率 30%未満または 1 葉当たりの雌成虫数が 0.5～1 頭）に防除を行う。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年 1 回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照とする。

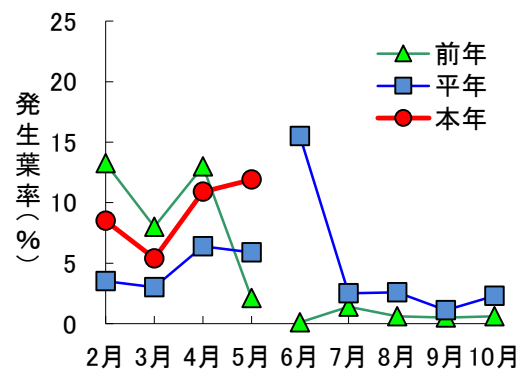


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①黄色粘着トラップ（図1参照）

平年比：並（±）

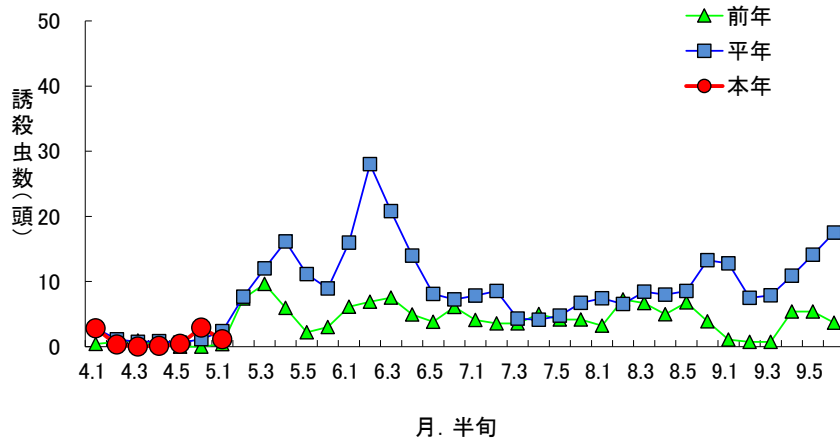


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量がやや多く、並発生条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、第2世代成虫の発生ピークは6月上旬頃にみられている。被害を防止するため、6月上旬までに薬剤防除を実施する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナシ

[【概要に戻る】](#)

定期調査8園場

調査日：5月20日



定期調査園場の様子

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0.1%（平年0.8%、前年0%）

平年比：やや少（－～±）

発生果率：0.4%（平年0.9%、前年0.2%）

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。

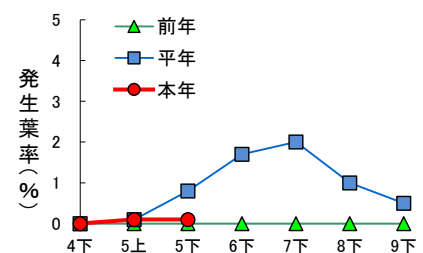


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

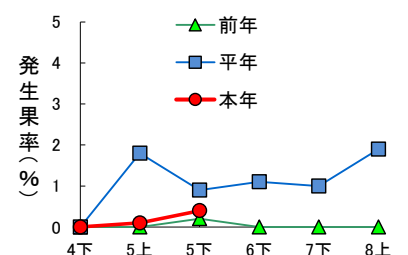


図2 ナシ黒星病（果）の発生推移

(3) その他については、特記事項を参照する。

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 県内に設置したフェロモントラップ（図1参照）

平年比：並（±）

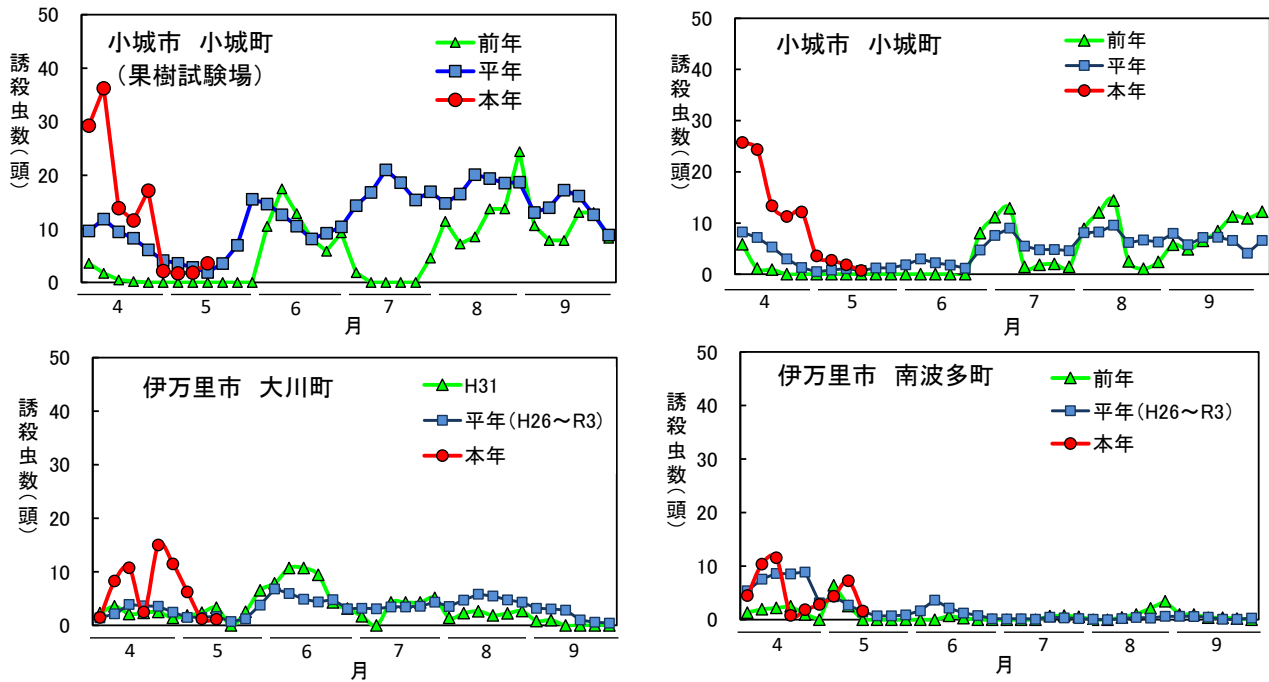


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 6 圃場

調査日：5月13～20日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 0.8% (平年 0.4%、前年 0.2%)

平年比: 並 (±)

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝葉の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

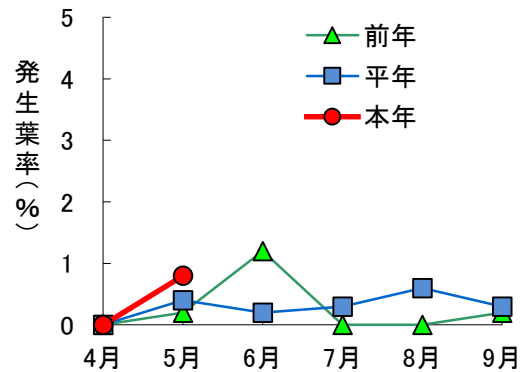


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 0.3% (平年 0.0%、前年 0%)

平年比: 多 (+)

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

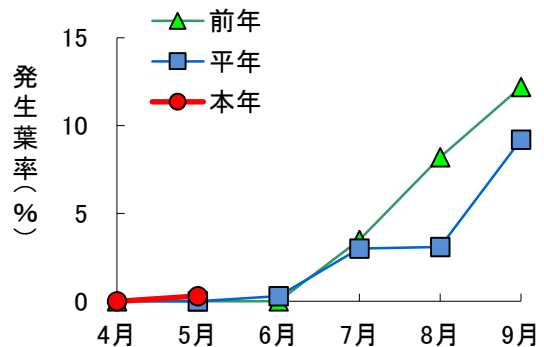


図1 ブドウべと病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) ブドウべと病では、ストロビルリン系殺菌剤 (アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等) に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量: 平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 黄色粘着トラップ (カンキツのチャノキイロアザミウマ (図1) 参照)

平年比: 並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量がやや多く、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月中旬~7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。

(2) 袋内への侵入を防止するために、袋の締め口をしっかりと締める。

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査 7 圃場

調査日: 5月13~18日



定期調査圃場の様子

1. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：2.3頭/4ヶ所 (平年 8.6頭、前年 8.4頭)

平年比：少(ー)

② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比：並(±)

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多く、やや少発生の条件(ー～±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

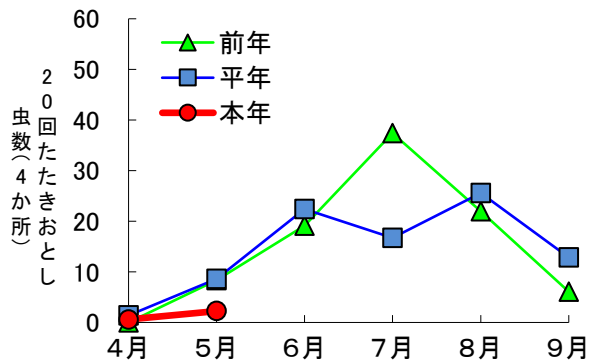


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

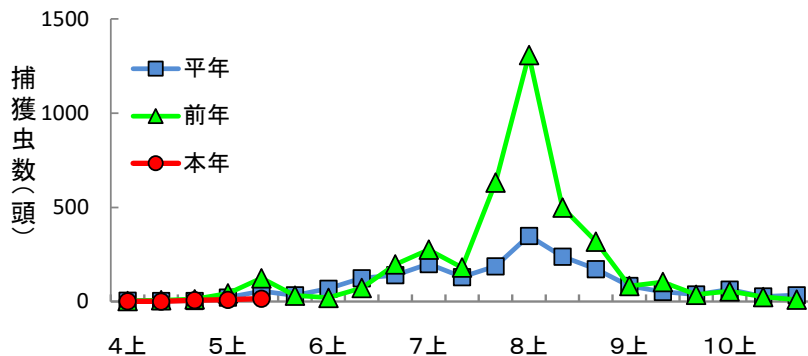


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：1.3頭/4ヶ所 (平年 1.9頭、前年 1.4頭)

平年比：並(±)

(2) 6月の気象予報

気温が並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

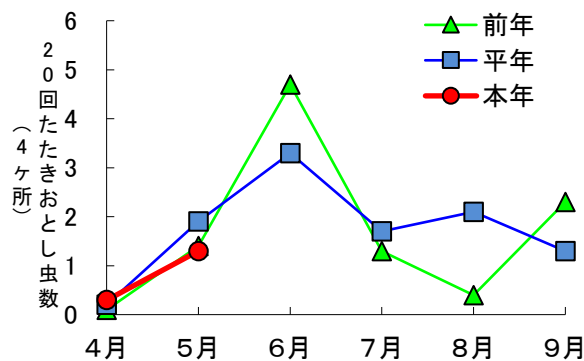


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

3. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照、)

被害葉数：0 枚/m² (平年 0.1 枚、前年 0 枚)

平年比：並 (±)

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温が並で、並発生の条件 (±)

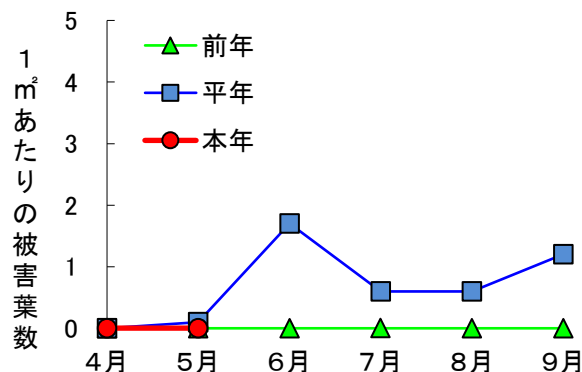


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 新葉展開期で幼虫が葉裏に潜行する時期に、薬剤が十分かかるように散布する。発蛾最盛期から1週間後、が防除適期である。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

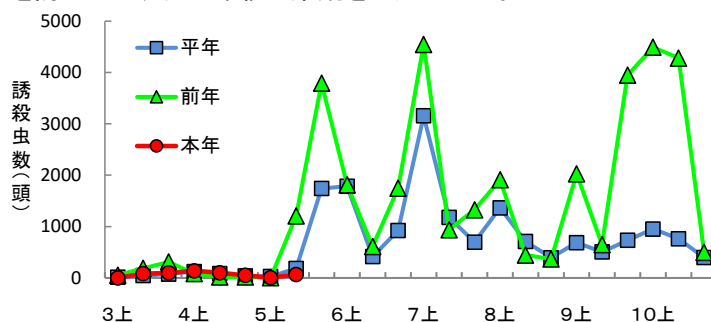


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

4. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照、H30 より5月調査追加)

発生葉数：0.9 枚/m² (前年 0 枚/m²)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

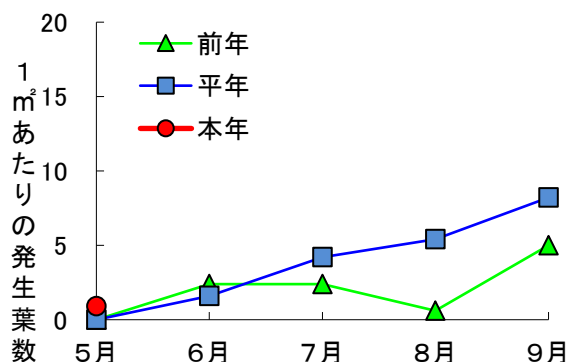


図1 炭疽病の発生葉数の推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi_jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

